

僕は後悔していない

僕は黙って、また、うなづいた。

「そうだ、僕と付き合ってください、
と言う言葉を、僕は生気にも手紙で使った。
そんな事は、形式でどうでもよかった。
ただ、会ってくださいだけでよかったのだ！」

そうその時思ったが、言葉にならず、
それでも、僕は黙っていた。

その僕の顔を彼女はじっと見ていた。

僕は、真っ黒で、顔がっやつやしている。

それに比べ、彼女の顔は色白く、かすかに、
ほっぺと、おでこがピンク色にほっている。

僕は真正面に座っている彼女の視線を避けて、
首を左にまげて、庭をじっと眺めて、
鑑賞しているかっこうになった。

彼女もだまり込み、
首を右に曲げて、庭を見た。
僕が見る庭の景色を彼女が追った。

僕は、このままじゃ駄目だと思い、
彼女の方を向いた。

彼女が僕を見て、笑みを浮かべた。